
仮面ライダー空我 ～ 青空の勇者(ニューヒーロー)・青空の伝説(ニューレジェンド)～

千藤 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー空我 〈ニコーヒーロー 青空の勇者・ニコーレジェンド 青空の伝説〉

【Nコード】

N2914W

【作者名】

千藤 光

【あらすじ】

現実世界とほぼ同じ町、空ヶ丘……この世界では現実世界同様に平和で仮面ライダーが普通に放送されている。そんな町に住んでいる高校生、空野 輝あきひは空ヶ丘の青空と仮面ライダーが好きである。

ある日、好きな女の子の目の前に謎の怪人が現れた。

「あの子を助きたい？」

その時輝は謎の少女に変身ベルト、アークルを手渡され、輝は仮面ライダー空我として空ヶ丘の青空を守ると決意する。

そしてある時、輝の親友、相葉 宏の目の前に記憶喪失で、ジューモ

クギアに変身できる青年、ミオが現れる。

果たして、怪人の目的とは！？ミオの正体とは！？そして輝はみんなの青空を守ることはできるのか！！！！

（キャラの出演を許可してくださった新島先生、空我と一緒に戦うオリジナルライダーを考えてくれたS君、感謝します！！）

1話 勇者復活！！（前書き）

まず、何故こんなを書くかというと、僕がクウガが好きだからです。

前からずっとクウガの小説を書きたいと思ってました。

ファイズの小説と掛け持ちになりましたが、頑張っていきます！！

1話 勇者復活!!

僕は空野 輝あかり！仮面ライダーとカレーと空ヶ丘の青空が好きな普通の高校1年生！

なんと僕は今から告白しに行くんだ！その子の名前は茜 ソラ なんていい名前なんだ……

僕は今屋上に向かっている。僕はソラちゃんをそこへ呼び出したんだ！あゝなんて言っ

「キヤーーーーーッ」

何だ？今の悲鳴。

急いでドアを開けるとそこには狼の顔をした怪物がいた。怪物は今にもソラちゃんに襲いかかろうとしていていた！

「やめろおおおおお！！！！！！！！！！」

走って行ったが間に合わない！！
鋭い爪がソラちゃんめがけて振り下ろされたその時、自分以外の全ての時間が止まった……

「何だ？これ？」

うろたえていると後ろから声がした。

「青春してるのね。君。」

そこには一人の少女が立っていた。

金髪のショートヘアーにその髪と同じ色のワンピースを着ている。クセ毛なのか一本だけ毛が跳ねている。どっちかというと小柄で、青い目のおかげで外国人と言うのはすぐ分かった。

「あの子を助きたい？」

少女は僕に問いかけてきた。

「当たり前だよ！どうやってたら助けられるんだ！？」

僕の頭はそれだけでいっぱいだった。

僕がこんなところに呼び出したばかりにこんなことになってしまったんだ。

少女は口を開いた…

「カンタンよ。君が仮面ライダーになるの。」

仮面ライダーに？

そんなものはテレビの中の世界にしかないと思っていた………しかしこんな状況では信じざるを得ない。

「君にはこの変身ベルト、アークルを託すわ。」

僕は驚いた！

「アークルってたしか……壊されたんじゃない………」

アークル……仮面ライダークウガになるためのベルト……しかしそれはクウガの最終決戦で破壊されて今はもうないものだった。

「そのことについてはまた今度！今はあの子を助けるのが先よ。」

そう言って少女は僕にアーケルを手渡した。

「よし！！——かハか……」

僕は腰にアークルを装着した！すると自分の体が光に包まれて……………

ソラは今にも襲われそうだった。

「誰か……助けてええええええ！！！！！」

そう叫んだ時、

「おりやああああああああああ！」

狼の怪物は飛び蹴りにより吹っ飛ばされた！！！！

「ソラちゃん、大丈夫？」

そこには、かつてグロンギという古代から復活した怪物と戦っていた勇者が立っていた…

赤い装甲に黒のボディ、クワガタをモチーフとした角の一本折れている仮面……

仮面ライダー空我！！！！

クウガは狼に向かって走っていく！！

「おらあつだあつはあつ！！」

連続でパンチを喰らわす！

「どりゃあ！！」

さらに上段蹴りを喰らわす！！

金髪の少女が逆側の校舎の屋上から戦いを見ていた。

「2人目のクウガも強いわね。しかし、あの怪物は何なの？」

今クウガが戦っている怪物は前述にあるグロンギではない。ましてやどの仮面ライダーシリーズの怪物でも無いのだ。

「また仕事が増えそうね。今はあの子に任せるか……」

そう言つて少女はどこかへ消えていった……………

「はっだあっオラアッ!!」

クウガは有効的に怪物にダメージを与えている。

「よし!そろそろ…」

クウガが右足に力を溜める。

「はあああああ」

そして怪物に向かって走り出した!

クウガが空を舞う!

「だあああああああっ!!!!!!!!!!!!!!」

クウガは飛び蹴りを喰らわせた

クウガの必殺技、マイティキックが炸裂した!!

「グワアアアアアア」

怪物は断末魔と共に爆発した…

僕はクウガからもとの姿に戻った。

「ソラちゃん！大丈夫！！！」

僕は急いでソラちゃんの下へ走って行った。

「ひつく…グスツ…輝君…怖かったよおお」
そう言ってソラちゃんは僕に抱きついてきた。

少しびっくりしたけど、ソラちゃんは本当に怖がっていた。僕が悪い。僕がこんなところに呼び出したから……

「ごめんね、ソラちゃん。僕がこんなところに呼び出したから……怖かっただろ？もうこんな思いはさせないから。僕がずっと守ってあげるから……！！！」

そう言ってソラちゃんをぎゅっと抱きしめた。

僕はソラちゃんを……空ヶ丘を……みんなの青空を守るんだ！！！！

そう心に誓った。

次回の仮面ライダー空我は！！

「あの怪物って……」

「ラミカって呼んで！」

「お前夢でも見ていたんだよ！」

「超変身！！！」

次回、超変身！水の青龍の力！！

青空を守る為に戦え！！！！

1話 勇者復活！！（後書き）

なんかオーソドックスな感じになりましたが後悔はしてません。

僕の永遠の心のヒーロー、クウガを小説に出来てとても楽しいです！

この話を作るにあたり、ラミカ出演の許可を出してくださいました新嶋先生、素敵なキャラにしてみせます、新嶋先生のとある顎門アギトの交錯クロス覚醒ライズのキャラです。こちらの方が面白いので、僕のヘタクソな小説より、こちらの方が千倍面白いので、読んでみてください。

オリジナルライダー？まだまだです。しかしすぐ出します。お楽しみに〜

2話 超変身！水の青龍の力！！（前書き）

前回のあらすじ

「止めろおおおおお！！！！！！」

「あなたにはこの変身ベルト、アークルを託すわ。」

ドカアー——ン

「みんなの青空を守ってみせる！！！！」

2話 超変身！水の青龍の力！！

昨日はあの後大変だった。

屋上でいきなり爆発音がしたんだ。騒ぎになってもおかしくない。僕とソラちゃんはあの後警察から事情聴取を受けたのだけれど、怪人が現れて、それを僕がクウガになって倒したと言っても誰も信じてくれなかった。おかげで教室では朝からクラスメイトに質問攻めだよ……

「アキラ！昨日ソラに何したのよ！！」

「何度も言ってるじゃないか！！いきなり狼みたいな怪人が現れて……」

「もっとマシなウソはつけないの！？もう聞き飽きたわよ！どうせ青空がどうのこうのとか言ってるなんかしたんでしょ！！」

「だから、本当に……」

「もういいわよ！！厨二病の相手してるところでちまでそうになったやいそうよ！」

そう言ってソラちゃんの親友の女の子は僕から離れた。そして最後に僕にこう言った。

「もう二度とソラには近づかないで！ソラにも厨二病が移っちゃうわよ！」

どうして誰も信じてくれないんだろう……まあ、それもそうだよね。
こんな話して信じる人はまずいないよね。
だけど近づかないではひどいよ……

僕は諦めて自分の席に戻った。そして空を見た。

「父さんは信じてくれるよね……」

空ヶ丘の青空は僕に元気をくれる。空ヶ丘の青空はいつも違う表情
を見せるんだ。僕はその表情を見るのがとても好きなんだ！

こんなことをみんなに言ってからかな。みんなが僕を変わり者って
言い始めたのは……

時間は過ぎて行き、放課後、僕は帰路についていた。

僕は昨日あったことについて考えた。

あの怪人のこと、2本目のアークルのこと、金髪の女の子のこと……

「あゝきゝらあああっ！」

そう聞こえた後で、背中に重い衝撃が走った。

「ギャッ！」

「相変わらず輝は鈍いな〜」

「いきなり膝蹴りとかひどいよ……」

彼の名前は相葉 宏、僕の親友だ。

「昨日フられた？」

「いきなりそれ？昨日はそれどころではなかったんだよ。」

「やっぱり昨日のこと本当なんだ。」

「宏君！信じてくれるの！？」

「昨日ソラちゃんに嫌がらせをして嫌われたこと！」

「宏君も！？？だからほんつつつとくに昨日は……」

「はいはいわかった信じるよ。」

「なんだよその言い方！」

そんなことを言いながら帰っていると後ろから誰かに呼び止められた。

「ちょっと君達いいかしら？」

そこには昨日僕にアークルを託したあの金髪の女の子がいた。

「ちよっお前なんでこんな金髪美少女と知り合いなの!？」

「だから言ったことは本当だろ?この子が僕にアークルを渡したんだよ。」

「どうせ出任せのウソだろ?大体何だよアークルって?」

「だからこの子は僕にクウガの変身ベルトのアークルを手渡した……ごめん、誰だっけ?」

昨日僕は戦いに夢中であの子の名前を聞き忘れていた…

「私はラミカ・リユミネート、ラミカって読んで!」

そう言ってラミカは微笑んだ。

「オレは相葉宏!野草とか草木についてはオレに任せてください!」

「ちよっ宏君!?君は関係ないじゃん!」

「えっいっじゃん!」

その様子を見てラミカはクスリと笑った。

「さあ、君の自己紹介はまだだったわね。」

ふう。やっと自己紹介できる。

「僕の名前は空野輝。僕は仮面ライダーには詳しいかな〜」

僕がそういった直後、ラミカちゃんの顔はこわばった。

「仮面ライダーを知ってるの？」

ラミカちゃんは僕に質問してきた。

「知ってるも何も仮面ライダーって超有名だよ！けどどうして？」

「まずいことになったわねえ。どこかゆっくり話のできるところはある？」

ラミカちゃんは少し焦っている様子だった。

「だったら僕の家に来るといいよ！」

ラミカちゃんと僕は家まで行くことにした。宏君はいると面倒なので、先に返した。

しばらくして……………

僕達は家についた。

「家って…………これ？……………」

「そうだよ。」

ラミカちゃんは驚いていた。

それもそのはず、そこは喫茶店だったからだ。

僕は姉と一緒にとある事情で喫茶店、『マイペンライ』に居候している。

僕達はマイペンライに入って行った。

「ただいま！！おやっさん！！！！」

おやっさんはこの店長である。顔は少々老けているが、40代には見えない体をしている。

「おかえり！輝君。その子は？」

「昨日言った女の子。」

「ラミカ・リユミネートと言います。」

そういつてラミカちゃんはおやっさんに礼をした。

「おやっさん！しろくま2つ！」

とりあえずそれを注文して、テーブルに座った。

「まず、何か聞きたいことはあるかしら。」

僕は一番の疑問をぶつけて見た。

「君は何なの？」

「まあ、詳しくは言えないけど、異世界って信じる？」

ラミカちゃんはいきなり妙なことを言ってきたが、だいたい察しはついている。

「まさか、ディケイドみたいに世界を旅しているとか！？」

「まあ、そんな感じね。仮面ライダーを知っているとすると話しやすいわね。他に聞きたいことは？」

「なんでアークルが二本もあるの？」

「あなたは昔、クウガは2人いたっていうことを知っているかしら。」

「マジで？本当に？」

「ハイしろくまお待ち！！！」

かき氷のシロップの代わりに練乳をかけた白いかき氷、南国名物しろくまが運ばれてきた。

「クウガが古代の戦士だったのは知っているわよね？」

「うん」

「古代のクウガは2人でグロンギと戦っていて、戦っている最中に一人が戦死したの。そして、その死体で作ったものがゴウラムなの。」

「へ」

知らなかった……クウガの設定も考古学見たいだ。

「するとこのアークルは……」

僕はラミカちゃんに聞いてみる。

「そう！その戦死したクウガのものよ。」

しかしまた新たな疑問が生まれた。

「どうしててそんなのもっているの。」

「仲間に託されたの。新しい変身者が現れるまで持つてろって」

そこまで言ったとき、放送が流れた。

ぴーんぽーんぽーんぽーん

空ヶ丘3丁目で謎の怪人が暴れています。市民の皆さんは外出を控えるようにしてください。繰り返します。空ヶ丘3丁目……

ここから近い！

僕はラミカちゃんと一緒に現場へと向かった。

そこにはトラの怪人がいた。腕には大きなカギ爪がついてみた。

「そこまでだ!!」

輝はトラの怪人の前に立ちふさがる!

輝は腹部に両手を構える。するとクウガへの変身ベルト、アークルが出現する。

輝は右手を斜め左に、左手をアークルの上に乗せて横に動かす。そして叫ぶ

「変身!!!!」

そう言つて輝は両手を重ね合わせ、左側のスイッチを押す。

すると輝は古代の戦士、黒いボディに赤の装甲の仮面ライダー空我に変身した!

クウガはトラに攻撃を仕掛ける。しかし、カギ爪で受け止められ、押し返される。トラはものすごいスピードでクウガを攻撃する。早過ぎてクウガは対応しきれない。一方的にクウガは攻められている。

「グルルルルル………ガアッ!グアア!」

「ガッ!ウワァッ!」

こんなとき、どうすれば……………？

その時、ふと転がっていたほうきがクウガの目に止まった。

よし！

クウガは攻撃をよけ、ほうきを拾い、再び変身ポーズをとる。

「超変身！！！」

するとクウガの装甲と複眼が青くなり、仮面ライダー空我、ドラゴン水青龍の姿へと姿を変えた！

「グワアアアアア！！！」

トラが襲いかかってくるが、最小限の力で避けて、ほうきを変化させたドラゴンロッドで間合いを取る。また襲いかかってくるトラの攻撃を避けてドラゴンロッドで叩きつける。さらにトラの体を連続で突きまくる！！！！

「ハアアアアアアッ！」

ロッドに力を溜める。そして最後の一撃を叩き込む！！！！

「うう……呪い……せっかく集めた呪いがあああああつ。ギヤアアアアアアッ」

断末魔と共にトラの怪人は爆発した。

呪い？

クウガの頭にまた一つ疑問が残った……………

僕は変身を解いた。

「あの怪人って……何だろう……………」

ラミカのケータイになる。ラミカのケータイは、ダークグレーのボディに黄色いラインのはいた特徴的なケータイである。

「もしもし？」

「チャーツス！」

相手はなんかしょっぱい敬語を使っている。

「あなただったのね。マモル」

「ラミカさん！バカンスはどうですか？」

「それが……………」

ラミカはこれまでのことを話した

「ヤバいことに巻き込まれたっすね…しばらくはそこに滞在して詳

しく調査して欲しいです。」

「わかったわ。」

そう言ってラミカはケータイを閉じた。

次回の仮面ライダー空我は！

グギョルルルルルルル

「記憶喪失？」

「だったらここに住もうよ!!」

「オレも……仮面ライダーに……」

次回、第2の仮面ライダー、樹木

みんなの青空を守るために戦え!!!

2話 超変身！水の青龍の力！！（後書き）

終わった……眠い……

今日体育祭でフォーゼ見れなかった。

ので体育祭での報告

1・徒競走で1位になった。

2青団が弱すぎて紅組に優勝をかつさらわれる。

閉会式で校長がと放送部がオンドウルしまくった

日常のoppが流れた。

文章がひどいのは、すごく眠いからです。（このあと加筆修正しました。）

3話 第2の仮面ライダー、樹木（前書き）

前回のあらすじ

「もう二度とソラには近づかないで！ソラにも厨二病が移っちゃうわよー!!」

「古代にはクウガが2人いたって知ってる？」

「超変身ー!!」

「とりあえずそこで調査してほしいっす。」

3話 第2の仮面ライダー、樹木

トラの怪人を倒した後をよく見渡してみると、周りは滅茶苦茶だった……

「ひどい………」

家のガラスは割れていて、停めてあった車はひっくり返っていた。

あいつら絶対許せない……

そう思っていると聞き慣れた声がした

「ああああああ輝！？こっ…コレ何だよ！？？」

「宏君！？大丈夫だった！？」

「おおおおお前の言ったこと本当だったの？」

宏君はだいぶ怯えていた。

「言ったでしょ！僕は仮面ライダーになったって！自分で言つのも何だけど僕は厨二病じゃないんだからね！」

「あれって確か、アギトって言ったっけ………」

「クウガだよ!!!」

良かった。大丈夫みたいだ。他に犠牲者もないようだし帰って食べかけのしろくまを食べるか。

「そういえばラミカちゃんどこだ？」

戦っている最中にいなくなったみたいだ。

「あついたいた！輝！」

すると向こうからラミカちゃんが走って来た。

「あっラミカちゃん！どこ行ってたの？」

「ちょっと電話がかかってきて……」

「ああ全然大丈夫ですよ！」

「何で宏君が答えるのさ！」

とかツツコミを入れていると、ラミカちゃんが口を開いた。

「あゝ？」

「何？」

「ここらへんに宿とかないかしら？」

「へっ？何で？」

「さっきの電話で仲間からここに滞在してあの怪人を調査してほしいって言われて……」

ん〜。そんなこと言われてもここらに宿とかないし……

そうだ！

「家にくればいいよ！」

「へっ？」

「マイペンライって喫茶店だけど、下宿もやってるし、僕もクウガとして戦っているからちょうどいいでしょ。」

「それもそうね。じゃあお願いしようかしら！」

「輝お前ソラちゃんという人がいながらあああ……！！！」

そう言っただけで宏君が首を絞めてきた。

「別にそういう意味じゃ……」

そこは薄暗かった。

カツカツカツカツ

白衣を着た女が歩いてくる。

「T33もやられました。」

声の先にはマントを着ていて、フードをかなり深く被った男が座っていた。

「別にいい。あれは捨て駒だ……。クウガか……。やはりあいつらは邪魔をしてきたか……。」

そう言ってマント男は立ち上がり、ネジマキをオリの大鷲にネジマ

キを差し込んだ。

「行つて来い……H52………」

ネジマキを差し込まれた大鷲はみるみる姿を変えていった……

宏は一人で歩いていた。

「チキショー！あいつハーレムでもしたいのか！？」

訳の分からない独り言を言っていると、あることに気がついた。

あれ？人が倒れているし………

グギョルルルルルル

10mも離れていたのに腹の音が聞こえた。

「あの人、ソートーヤバいでしょ……」

宏は倒れている男に近づいた。男は二十歳くらいだろうか。まだ若い顔をしていた。

「大丈夫ですか？」

声をかけると男はこっちを見てこう言った。

「腹減った……お願い何でもいいから何か食わせて……!!」

宏は困った。今はお金持っていないし、食料もない。どうしようか迷っている、あることに気づいた。

ここ、河川敷の土手じゃん！

2人がやいやいやっている時、どこからか大鷲の怪人が宏の前に飛来してきた。

バサッバサッ

「お前の呪いを奪わせてもらう。」

「ちよつ、今それどころじゃ……」

宏が後ずさりすると、男が手を叩いていった。

「あっ思い出した。オレは……」

男も場の変化に気づいたみたいだった。

男はおもむろに空中前転をした。すると男の体は光に包まれ、ベルトへと姿を変えた！

宏はベルトをつかんだ。するとベルトから声が聞こえた。

「オイ！オレ一つ思い出した！！オレは変身ベルトのジュモクギアに変身できるんだった！！」

「はあ！？？」

宏は驚いていた。

「変身ベルトに変身ってなんなんだよ！！」

大鷲は今にも襲ってきそうだった。

「お前が仮面ライダー樹木になるんだよ!!」

ジユモクギアは叫ぶ!

「オレが……仮面ライダーに………」

「そうだ!オレを装着して変身って叫べ!」

「ああもうどうにでもなれ!!!!」

そう言つてベルトを装着して、左手を上へ上げ、右手でバックルのレバーをつかむ。

「変身!!!!」

そう叫び、レバーを右から左に動かす。すると体が木の葉に包まれ、緑のボディにクウガとは対照的に機械的な装甲、カブトムシをモチーフにした角張った仮面の仮面ライダー樹木へと姿を変えた!!!!!!

「何!?!」

大鷲は驚いている。

「おお。」

樹木は感嘆の声をあげる。

「来るぞ！」

大鷲はさっきのトラと同じくらい鋭い爪で襲って来る。

ガイン！

それを左腕で受け止め、はじき返す。

「らああああっ！！」

重いパンチを大鷲に喰らわす！

「でいつ！ダアッ！おりゃあっ！」

さらにパンチを喰らわす！

「オイ、ベルトの右側のこれ使え！」

そう言われ、右側を見ると、何やらゼンマイがついている。

「ベルトの真ん中にそれを差し込んで武器を呼び出せ！」

樹木は『リーフブレード』と刻まれたゼンマイを取り出し、ベルトの真ん中につけて回してみる。

リーフブレード！！！！

電子音がした後に緑色の剣、リーフブレードが現れる！

樹木はそれをつかみ、大鷲を斬りつける！

「たあつ！はあつ！セイッ！」

「ガッ！ギヤッ！があっ！」

大鷲は片膝をついた！

「よし！必殺技だ！」

「ええっ！オレキックとかムリだからな！」

「うわっ！マジかよ！じゃあカンタンなの教えるから……。」

もうリーフブレードは直されていた。

「まず、両手に力を蓄えろ。」

樹木はカメハメハのポーズをとる。

「はあああああつ」

ジュモクギアは叫ぶ！

「打ち出せええええええ！！！」

「だああああああああああつ！！！！！！！！」

気合い玉を大鷲にお見舞いする。

「ぎゃああああああああつ!!」

大鷲は爆発した。

樹木はレバーを戻して変身を解いた。

男も変身を解く。

「悪かったな。少年……あの草つまかったぜ!」

そう言って男は帰ろうとした。

「待てよ！！！！」

男は宏に呼び止められた。

「これからどうすんだよ……」

「さあな。」

男はそっけなく答える。

「オレン家にこい。」

宏は力強く言った。宏は無意識に口に出していた。

「お前といっしょならまた怪人が攻めてきても大丈夫だろ。オレは相葉宏、よろしくな！」

そう言っただけで宏は手を差し出した。

男と宏は握手をした。

「オレは……名前分らないんだった！」

男は笑った。

宏がふと男の着ているジャケットに目をやると、何やら書いていた。

「M……I……O……。よし！お前の名前はミオだ！」

「ミオか！いい名前じゃねえか！！」

笑いながら2人は河川敷の道を歩いていった……

ここはマイペンライ！

おやっさん曰わく、マイペンライとはタイ語で「大丈夫」というみたいだ。

今、僕たちは店内でマイペンライ特製の納豆カレーを食べている。

僕たちというのは、僕とおやつさんとラミカちゃんとお姉ちゃん、美咲の4人だ。

「なんか突然すみません。」

ラミカちゃんがニンジンを僕の皿に移しながら言う。

「大丈夫だよ！部屋はいくつも空いているしね！」

そう言ったおやつさんは納豆のかかっているカレーにさらにソースをかけている。

「昨日の話本当だったんだ。」

お姉ちゃんがカレーを頬張りながら言う。

「やっぱり信じてなかったんだ……」

今のところ信じてくれているのはおやつさんと宏君とお姉ちゃんだけである。

「はあ」

ため息をつきながらニンジンまみれになったカレーを口に運んだ。

ニンジン美味しいのに……

そう思いながらラミカちゃんの顔を見ると、なんか寂しそうだった。

「どうしたの？」

「ううん！ただ昔を思い出していただけだから。」

そう言ってニンジンのなくなったカレーを口に入れた。

まあいいや。よし！明日もがんばるぞ！！

そう思い、僕は納豆ニンジンカレーをかきこんだ。

次回の仮面ライダー空我は！

「輝君……なんか……ごめん。」

「空ヶ丘署の飯島です。」

「ツノ一本折れてるの！？」

「これだ！」

次回、攻めのレイニー！守りのタイタン！！

青空を守るために戦え！！

3話 第2の仮面ライダー、樹木（後書き）

まず、新嶋先生！ラミカの設定を少しいじってごめんなさい！こうすれば可愛くなると独断で決めてしまいました！

さて、仮面ライダー樹木こそ、あのS君が考えたオリジナルライダーです。

しかし、人がベルトに変身以外は設定をかなりいじりました。本来ミオは20代ではなく、50代の忠 尾という男で、変身も、ゼンマイを回した後、ワインダーを引いて、エンジンをかけて、変身するというので、（もちろん環境に悪い。）極めつけは必殺技がギャリック砲というかなりむちゃくちゃな設定でした。

これでは正義のヒーロー、仮面ライダーではないので変えました。S君文句があるなら感想によろしく（ハ―ハ）／では。

4話 攻めのレイニー！守りのタイタン！1/2

（ああ〜どうしよう…………）

輝はすごく悩んでいた。

輝は初めてクウガに変身したことを思い出していた。

『ソラちゃん。怖かっただろ。』

（いくらノリといっても付き合ってもいない女の子を抱きしめるのはヤバかったかな〜。絶対ソラちゃんに嫌われたよ〜）

「嗚呼…………」

今更である（笑）

「うあ〜〜〜きい〜〜〜らああああッ！！」

いきなり宏が席に座っている輝に強引にドロップキックを打ち込む。

「グアハヘエア」

ガッシャーン!!

輝、机、椅子、鞆が真横に吹っ飛んでいった。

「ぐおおおお。いちいち宏君は登場がバイオレンスなんだよ……………」

苦悶の表情を浮かべながら上に乗った机をどかしながらふらふらと立ち上がる。

「何？今度はどうした……………」

輝は宏を見て絶句した。

「……………」

宏がドロップキックの着地を頭からしてしまい、只今宏は頭を抑え、絶賛悶絶中であつた。

「できないならやるなよ……!!」

(・・ε・・)しばらくして

まず宏が口を開いた。

「実はな、オレな、何になったと思う？」

「宏君？日本語になってないよ。」

宏のアホさに輝はただただ呆れるだけである。

「んで？何になったの？」

また妙なことをいうんだろ、と心の中で呟きながら、宏の返信を待つ。

「実は、オレ、ついに……」

「うんうん。」

輝は次の言葉を聞くまでは、宏をただのアホな親友としか見ていなかった。

「仮面ライダーになったんだ!!」

輝の目は輝いた。

「えっ！マジで!!!」

宏は樹木に変身した時のことをこと細かに説明した。

「すっげー！変身ベルトに変身ってカッコイ〜〜！」

「エヘヘ。もっと誉めて〜ん」

まあ、輝が誉めているのは、宏ではなく、ミオなのであるが……

「まゝたあの二人おかしな会話してる。」

そう言ったのは、輝を厨二病呼ばわりしたあのブスである。（自分の顔も解らずに人のことやたらめったらいうやつたまにいるよね〜）

「ねえ、ソラ。なんであいつのことが好きなの？」

ブスとは別の少女がソラに話しかける。

「あの時……私のこと……守ってくれるって言ったから……。」

顔を赤らめながら、その時を思い出すかのように、ゆっくりと茜ソラは言葉を紡ぐ。

「あの時って？」

「輝君が初めて仮面ライダーになった時…かな？」

少し恥ずかしそうに微笑む。

「ソラ！まだそんなこと言ってるの！？」

ブスが机を叩きながらソラに訴えかける。

「なんで信じてくれないの？」

ソラは、輝同様に困っていた。あの時の話をしても、一向に誰も信じてくれないのである。

ここは、現実。何も見ていない人はそんなことを言われても、テレビ中のことが現実にかかるはずはないと相手にしてくれないのが、正しい対応である。しかし、ソラも輝も宏もしっかりこの目で見るのである。

「放送だって流れたじゃん！」

これなら、みんな聞いているから知っているはず！そう思い提示した言葉だったが、一蹴された。

「どーせ訓練かなんかでしょ。」

「何よ！三丁目で怪人が暴れてるって！」

アッハッハッハッハッハ

二人は笑っていた。

「どうして……危ないのに……」

ソラは初めて、彼女らは本当に友達なのかと疑問に思った。

カツカツカツカツカツカツカツ

白衣を着た女が薄暗い廊下を歩いている。
女は実験室のような場所へと入って行く。

「P602、F37、サンプルは準備できました。」

白衣の女は、ネジまきの入ったトレイを、黒いフードを顔が隠れる
までかぶった男に渡した。

「実験は良くも悪くも、予想の範囲内だ。ただ……」

「ただ？」

「仮面ライダーの出現以外は……」

男はトレイを受け取り、まるで動物園かというくらいの動物の檻に
歩みよる。

「空我……樹木……目障りだ……」

男は、ゴリラとトカゲにそれぞれネジまきを差し込んだ……

}} A f t a r S c h o o l } }

輝と宏はマイペンライへと入った。どこからつれて来たのか、ミオも一緒だ。

「ただいま}}」

「こんにちは}}っす」

「アニヨハセヨ」

（宏君、記憶喪失をいいことに妙なことを教えているな？）

きつとこれは韓流ブームに悪ノリしてしまったせいだろうと輝は思い、3人はマイペンライへと入ってゆく。

するとそこには、おやつさん、輝の姉、黄色いセーラー服を着たラミカの他に、見慣れない人がいた。その人は長いジャケットをスーツの上から羽織っていた。

「おお、輝君、宏君、お帰り！」

おやつさんは2人に2人に手を振ってあいさつした。

「その人は？」

輝が問いかけると、ジャケットの男はこっちを振り向き、スーツのポケットから、手帳を取り出し、言った。

「初めまして。空ヶ丘署飯島と言います。」

飯島は警察手帳を取り出し、頭を下げた。

（刑事さんが何の用だ？）

不思議に思い、ふと横を見た。

すると宏がすごい顔で青ざめていた。

（えっ？はっ？どうしたの??）

すると宏が口を開いた。

「す……す……す……すみませんでしたああああっ……!!」

(((え え え え え え え え え え え え え え え
え ! ! ! ? ? ?)))

T o b e c o n t i n u e d

4話 攻めのレイニー！守りのタイタン！1/2（後書き）

まず、更新遅れてすみませんでした！！！！

9月半ばにスランプに陥り、スランプも脱したところ、ファイズ進め初めて、そろそろ空我と思ったら、魔のテスト期間に入ってしまったというわけです。

正直、ここまで溜めるつもりは全くありませんでした。

次に、ラミカの衣装ですが、黄色いワンピースから、黄色いセーラー服に変えようと思います。理由は、黄色いワンピースというのが、いまいちイメージしづらいからです。そして、異世界から来た人だから、少し変化が欲しいなあ〜と思ったからです。新嶋先生、たびたびすみません！

最後に、この小説を書いている理由です。

1話で、「クウガが好きだから」と書きましたが、それより重要な理由があります。それは、「もし現実世界にいきなり怪人が現れて、自分が仮面ライダーになつたら」という話を、この小説サイトにくる前から考えてたからです。けど、輝とオレは性格全く真逆です。どっちかというと、ファイズNexの沢村巧の方が性格近いです（笑）

空ヶ丘が現実の世界ということを再認識させるための回でした。

次回はついにバトルです！期待せずに待っていてください。すぐ書けると思います。

では（＾ー＾）／

4話 攻めのレイニー！守りのタイタン！2/2（前書き）

続きどうぞ

4話 攻めのレイニー！守りのタイタン！2 / 2

「ちよつ、宏君！？何やったの！！？」

宏を起こしながら輝は宏に問いかけた。

「えっ？あ。いやあ特に何もしてないよ。」

「「「「何じゃそりゃ！」「」「」」」

5人がずっこけたのは言うまでもない。

「いやゝ、条件反射つてやつ？アツハツハツハツ」

（アツハツハツハツハゝじゃないよ。まったく。）

「ええと、話を進めていいかな？」

輝が呆れていると、飯島が一步前に歩みよってきた。

「実は、ここ最近未確認生命体が暴れているという通報が何件かきているので、聞き込みをしていたところなのです」

すると輝は飯島に気になることを聞いてみた。

「あの事信じているんですか？」

飯島はポケットから少し大きめの茶封筒を取り出しながら続けた。

「証拠写真が沢山あるのでね。」

そう言つて飯島は茶封筒から何枚か写真を取り出した。

「あつ！これオレだ！」

そう言つて宏は樹木と大鷲が戦っている写真を手にとり、ニヤニヤしながら眺めていた。

「あのく、オレというのは……」

輝と宏は自分が仮面ライダーであることを詳しく話した。

「なるほど……君達が……」

宏は満足げにふんぞり返っていたが、輝だけが写真を手に、震えていた。

「こんなの……クウガじゃないよ……角が一本折れてるなんて……」

「当たり前よ。一度死んでいるのよ！歴戦の勇士と思えばいいの！」

ラミカが写真を覗き込みながら言った。

「私たち空ヶ丘署は、未確認生命体特別対策本部を設置しているの
で、もしまた何かあったら連絡ください。では私はこれで。」

そう言つて飯島は名刺をカウンターに置いて帰っていった。

「警察かあ」

（何かクウガ本編と同じ感じになってきたなあ）

そう思い輝が鞆を下ろした時、おやつさんが笑顔で輝に近寄ってきた。

「悪いけど、買い出ししてきて。」

~~~~とある通り~~~~

輝「何で2人もついてくるのさ…」

宏「パトロールも兼ねてだよ!」

ミオ「社会勉強もしたいしね」

まあ、いいか。

輝がそんなことを思っていると、どこからか、例の未確認生命体が3人に襲いかかってきた。

「「「ワアアッ!」」」

一方は、鎧をつけたゴリラ、もう一方は炎を身に纏ったオオトカゲ。

「いくぞ!ミオ!」

「おお!」

ミオはジュモクドライバーに変身し、宏はそれを腰に装着する。

輝は変身ベルト、アークルを出現させ、変身ポーズをとる。

「「変身!!!」」

輝はアークルの左側で手を重ね、スイッチを押すようにして、クウ

ガに変身する。

宏はベルトのレバーを180度動かす。宏の身体は木の葉に包まれ、樹木へと変身する。

「「シャアっ」」

クウガは鎧ゴリラに、樹木はオオトカゲへと攻撃をしかける。

「ウワアッ」

クウガはいきなりゴリラに吹っ飛ばされた。

クウガは近くに鉄パイプが落ちているのに気がついた。

「これなら防御力を強化して、吹っ飛ばされないはず！」

クウガは鉄パイプを拾い上げ、再び変身ポーズをとる。

「超変身！」

クウガは赤のマイティフォームから、騎士の鎧を彷彿とさせる装甲のタイタンフォームへとフォームチェンジした。

一方樹木は……

「ウワアッ！絶対不利だって！！！」

樹木は炎攻撃をただ避けるばかりであった。

「フォームチェンジだ！」

ジユモクドライバーが叫ぶ。

「左側のゼンマイ！」

「ん」と

これだ！

樹木は雨と書かれたゼンマイをバツクルに差し込む。

>レイニーフォーム！<

電子音と共に、緑のボディから、水色のボディのレイニーフォームへとチェンジした。

クウガ

「タアッ！ハアッ！ドリアア！」

クウガはタイタンソードで鎧ゴリラを切りつけていく。

「ガアアアッ」

鎧ゴリラのパンチが決まる！しかし、装甲の厚いタイタンフォームの前ではそんなものは無意味なのである！

「ハアッ！ダアッ！オオリヤッ！」

ギンギンギンギン

鎧ゴリラはどんどん斬りつけられていく。

そろそろ

「ハアアアアアッ」

クウガがタイタンソードにパワーを溜める。

「リヤアアアアアアアッ！！！！！」

クウガはタイタンソードを振りかざし、鎧ゴリラをまっぴたつにたたっ切った！

「ギヤアアアアア！」

鎧ゴリラは爆発した。

樹木

バシュン！バシュン！バシュン！

樹木はレイニーフォームの武器、レインシャワーガンで水の弾丸を炎を纏ったオオトカゲに打ち込んでいる。

「グエエエエエエ！」

炎に水はかなり相性がいい。

「よし！トドメだ！ガンにゼンマイを差し込め！」

樹木は右側から、チャージショットと書かれたゼンマイをシャワーガンに差し込む。

>レイニーパワーチャージ！<

水の力を最大限まで溜め込み、チャージショットをオオトカゲに打ち込む。

「ギアアアアア！」

ドカーン！

オオトカゲも爆発した。

2人は変身を解いた。

「何だこれ？」

輝はオオトカゲが爆発したあとに、ゼンマイが落ちているのを見つけて、拾い上げた。

「Error？」

次回の仮面ライダー空我は！

あなたも乗りたい？

ツチャース！

今、僕は大空を……

ドオツドドドドドドドドロボーっ！！

次回！大空へ羽ばたくマシン！

青空を守るために、戦え！！

#### 4話 攻めのレイニー！守りのタイタン！2/2（後書き）

次回予告通りに行かないことがよくあるので、注意して下さい。そして、またしばらくお休みします。次は実力テストがあります。ス  
イマセン！

感想&amp;mp・お気に入り登録お願いします！では（＾|＾）／

## 5話 大空へ羽ばたくマシン！（前書き）

前回のあらすじ

「実は俺！仮面ライダーになったんだ！」

「空ヶ丘署の飯島です。」

「歴戦の勇士と思えばいいの！」

「レイニーフォーム！」

「error？」

## 5話 大空へ羽ばたくマシン！

輝は炎オオトカゲが爆発した所から、一本のネジ巻きを拾い上げた。

「Error?なんだこれ……………」

輝は不思議そうにネジ巻きを見ていた。

「そついえばお前の方は？」

宏は鎧ゴリラが爆発した所に行ってみた。

しかしそこにあつたネジ巻きはクウガタイタンフォームの必殺技で真つ二つになっていた。

「バカアアア！少しは考えろ！」

宏が輝に跳び蹴りを喰らわす。

「ギャツ！」

輝は衝撃でネジ巻きを取り落とす。

「だって知らないんだもん！」

そう言つてネジ巻きを拾い上げようとすると……………

「あれっ!？」

なんとネジ巻きがみるみる消滅して行って、遂には消えてしまったのだ。

「どういうことだ？……………」

二人は驚きを隠せない。

「とりあえずこれだけでも飯島さんのとこ持っていくか。」

宏はそう言って真つ二つになったネジ巻きをポケットに入れ歩き出した

「戻ってきました。」

白衣の女の手にはさっきのネジ巻きがあった。

「まだまだ駒は増やせるな……………」

黒マントの男は不敵に笑ってみせる。

「樹木の行動は想定内だが……………やっぱりクウガは邪魔だ……………早めに排除せねば……………」

そう言って別のネジ巻きを手でもてあそんでいた。

♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀

次の日

輝はグラウンドにいた。  
それは何故かというと

（よし！飛ぶぞ！！）  
「行きます！」

輝は一声叫び、走り高跳びのバーへと走っていった。

輝はバーの手前で片足を踏ん張る！

（よし！これで大空を飛ぶように……）

イメージはしたが上手く行かず……

「ウギャッ！」

輝は背中をモロにバーにぶつけた。

「いって……ってうわあああ!!」

そして輝が失敗した拍子に支えの支柱も輝の元へ倒れてくる!

しかしそれは練習をすべて見てた宏によって防がれた。

「ったく。何でまた陸上部なんか……」

そう、輝は何故かいきなり陸上部に入ったのだ。

「体鍛えようかなって思ってた……」

輝は苦笑を浮かべながら言う。

「だったらボクシング部があったじゃん!」

「いや、そこにもいったんだよ!」

~~~~~

ボクシング部

部長「どうしてここに入ろうと思った。」

輝「強くなりたいからです!」

部長「ボクシング部をなめるなああああつ!……!」

そう言われ輝はボクシング部の練習場から放り出された（物理的に）

~~~~~

「なるほどな。」

宏は高跳びのマットに座って腕を組み、うんうんと頷いてみせる。

「じゃあ柔道部は!？」

隣に座った輝の方を向いて聞く。

「いったけどさ……」

~~~~~

柔道部

どっかの高校の柔道部「たのも〜」

うちの柔道部「なんじゃコラア!」

どっかの高校の柔道部「先輩の仇打ちじゃあああああ!」

部長「上等じゃあああああつ!やれええええええ!」

全柔道部全員「~~~~~うおおおおおおおおおおお
おおおおおおお!」~~~~~

覗いてた輝「うわああ……………」

~~~~~

「さすがバカ柔道部」

宏は溜め息をつきながら言う。

「宏君。」

輝は宏を睨んだ。

「ん？なんだ？」

「とばけないでよ！もうあきらめてよ！」

「今からでも遅くはない！さあ！」

~~~~~

園芸部

宏「いいから入れよ！」

輝「体鍛えるの関係ないじゃん！」

宏「プリンター運び手伝えば筋肉つくぜ！さあ一緒に……………ってどこ行った輝あああああっ！」

~~~~~

「宏君。もう陸上部入ったから無理。」

宏はその場に崩れ落ちた。

そんなこんなで部活も終わり、2人はマイペンライへと歩いていた。

「こんな時に長崎カステラとかおやつさん出さないよね。」

輝は喉がカラカラなのである。

「カレーソーダとか出されたらおしまいだな。」

宏は笑いながら石を蹴っ飛ばす。

ブ  
ロ  
ロ  
ロ  
ロ  
ロ  
ロ

その時、後ろからエンジン音が近づいてきた。

2人が振り向くと……

「ラミカちゃん！」

ラミカが仮面ライダーカイザの専用マシン、サイドバツシャーに乗ってこっちに向かってきていた。

「あら！宏君！久しぶりね！」

ラミカがサイドバツシャーを2人の前で止めて、ヘルメットを脱いだ。

セーラー服で少女がバイクに乗っているというのはなんとも不釣り合いな光景だったが不思議と自然に見えた。

「ラミカちゃん！かつこいいよ！」

宏は目を輝かせながらラミカを見上げる。

「これサイドバツシャーじゃん！」

輝は目を見開きサイドバツシャーを眺めていた。

「あなたもバイクに乗りたい？」

突然ラミカが話しかけてきた。

「乗りたい！！」

2人は元気よく返事をした。

「よし！じゃあついてきて！」

そう言つてラミカが指を鳴らすと、どこからか灰色のオーロラが現れて、ラミカと輝とサイドバッシャーを包み込んだ。

宏は置いてけぼりにされた。

「……………ナンデダヨーーーーーっ」

輝達が飛ばされたのは、自動車教習所のようなところだった。

「……は？」

輝は初めて世界を飛び越えたこともあつて少しそわそわしている。

「ラミカさーん！」

後ろで声がしたので振り返って見た。

「マモルー！連れてきたよー！」

振り向いた先には輝と同じかそれより下くらいの少年がいた。

「チャーツス！」

なんかしょっぱい敬語を使っている。

とりあえず2人はマモルと呼ばれた少年のところまで近づいた。

「紹介するね！こっちは空野 輝。こっちは大地 マモル。」

「よろしく」

「よろしくっす」

2人はとりあえず握手した。

「マモルは機械いじりとかが得意なの。だからあなたのバイク作ってもらったのよ。」

「へえ。すっげ〜！」

輝は尊敬の眼差しをマモルに向ける。

「じゃあ早速輝さんのバイクを紹介しますね！」

そう言つてマモルは何かにかけられた布を取る。

輝は目を見開き驚いた。

「トライチェイサーじゃん！」

チツチツチツとマモルは指を横に振りながら言う。

「まだまだ甘いつすね〜。ベースはトライチェイサーっすけど、ちよつと違うんっすよね〜」

確かに、トライチェイサーの赤い部分が空色になっていて後ろに何やらちつさめのボックスがついている。

「完全に輝さんのオリジナル機体、トライチェイサーならぬ、スカイチェイサーっす！！」

「すっげ〜！かっこいい〜！！」

輝は子供のようにはしゃいでいる。

「ゴウラムとの合体にも対応してるっすよ！」

輝の頭に？が浮かんだ。

「ゴウラムって僕じゃ……」

マモルはラミカと一瞬目配せしてから言った。

「まあ、その辺は後々っす!」

それを聞いて不思議に思ったが、問い直すことはしなかった。

「じゃあマモル君! バイクありがとう!」

そう言ってスカイチエイサーを押して歩く。

「じゃあマモル、今度もよろしく!」

ラミカが指を鳴らして次元の壁を出す。

「さよならーっす!」

そう言っつて2人はかえって言った。

輝が元の世界に戻ってくると、いきなり怪物に襲われた。

「「うわっ!」」

そこには体にモーターのついたチーターが立っていた!

ビュン!

すごい速さでチーターは逃げ出した。

「あつ待て!」

そう言つて輝はスカイチェイサーに跨り、チーターを追いかけた。

ヴオオオオオオオオオオン!

スカイチェイサーは速いが、なかなか追いつけない。

(300km以上とかもう無理だろ〜)

輝が諦めかけたその時!

ドン!

横から緑のバイクがチーターを引きとばした!

「ふうく間に合った」

そのバイクには樹木が跨っていた。

「どうしたのそのバイク！」

輝は樹木に近づき問いかける。

「そついえばこれどうした？」

宏も知らないらしい。その代わりに、ジュモクドライバー……………ミオが答えた。

「道で拾った！」

（どどどどどロボーーーーーっ）

「まあいいや。とにかくアイツ！」

チーターはさっきので結構ダメージを喰らっていた。

「変身！」

輝はクウガに変身してチーターを攻撃する。

「クヌギマグナム！」

樹木はゼンマイで武器を呼び出し、木製のマグナム銃でクウガの援護をする！

「タアッ！ハアッ！ダッ！おおりゃ！」

凄まじいラッシュの直後すぐ上段蹴りを食らわす。

「輝！ライダーキック行け！」

「OK！はあああああつ」

クウガが右足にパワーを貯める。

「ドリヤアアア！！！！」

助走をつけてチーターにマイティキックを食らわす。

「ぎゃああああああああああつ！！！！！」

チーターは断末魔と共に爆発した。

「「いゝい！」」

2人のライダーはハイタッチをしてそして変身を解いた。

「なかなかやるなあ。」

2人の戦いを物影から見ている少年がいた。

「けどこのままじゃ彼らも持たない。俺も早く出ないと。」

そう言って少年はその場を去った。

彼の手には黒いカードデッキが握られていた。

次回の仮面ライダー空我は!!

転校生!?

僕はベタベタまとわりつくヤツは嫌いなんだ。

こいつは！？？

嫌ああああつ

ガバッ

変身！

オイ、嘘だろ……………

次回、漆黒の転校生

青空を守るために戦え！！

## 5話 大空へ羽ばたくマシン！（後書き）

意外と長くなりました。反省点は輝がいきなりバイクに乗れたという矛盾点ですね。直す気はさらさらありません。  
ミオバイク拾うとかすげーなー。尊敬するよ。

最後に、少し重要なお知らせです。この小説でのコラボを募集しています！もしコラボしたいって人がいたら感想にお願いします！  
ではまた次回

## スピンオフ 1 (前書き)

時間稼ぎと思ってもらって結構ですが、こんな話もけっこう頑張  
て(↑大して考えてないけど)書きましたので、読んでください。

## スピンオフ 1

パート1 これが僕らの空ヶ丘！

日曜午後3時。喫茶店マイペンライが一旦閉店する時間

「ふうー。疲れた〜。」

輝は手伝いを終えて遅めの昼食をとっていた。

ちなみにメニューは沖縄名物のソーキそばである。マイペンライは日本中の名物料理を食べられるというすばらしい喫茶店なのである。

「ねえ輝？」

小柄で一本毛が跳ねている金髪の少女がソーキそばをすすりながら話しかけてきた。名をラミカ・リュミネートという。

「何？」

輝は具の三枚肉を口に入れようとして、一旦止める。

「そつえば空ヶ丘ってどんなところなの？」

「そつえばまだ言ってなかったね。空ヶ丘はね…… 80年代のバブルの時代に東京のまだ開発されていないところを切り開いて作ったニュータウンなんだ。バブルの頃は人口は8千人とか言ってたけどバブル崩壊と一緒にだんだん人も減ってきて、今は2千人ちょっと

とくらいしかないさびれた田舎町になっちゃったんだ。」

「ふーん。そうなんだ。」

ラミカは再びそばをすする。

「これ食べ終わったら町を案内するよ!」

〈3分後〉

輝たちはとりあえず外に出た。

「西側に見える高い塔がテレビ塔。通称空ヶ丘タワー!」

「特にこれと言って特徴はないわね。」

「じゃあ次は町の方に行こう!」

〈商店街

「ここが空ヶ丘銀座!」

「ここも普通……っていうか店少くない?」

「肉屋、八百屋、服屋、本屋、文房具屋、ラーメン屋、写真館、なんかの会社、ホビーショップ………本当だ!」

「いつも買い物はここ?」

「マイペンライでの食材はここで買っけど、ほとんどの人が近くのショッピングモールとか行くなぁ」

「なるほど。シャッター商店街ってとこね。」

輝たちが引き返そうとしたその時!

「おお輝!そっちの子はこれか?」

と言って右手の小指を立てる。

「違っつて!ただのお友達だよ!」

輝は顔なじみのようで、普通に会話を続ける。

「ラミカ・リユミネートと言います。」

ラミカは礼儀正しくお辞儀をする。

「おお、こりゃどうも。俺は肉屋の原口。よろしくな!お嬢ちゃん!」

そう言っつてラミカに特製のメンチカツを渡した。

「おじさん!僕は?」

「無い!」

しばらく歩いて。

輝)「ここが僕の通ってる高校！」

ラミカ)「都立空ヶ丘第二高校？」

輝)「ああ、公立なのに第二っていうのは、空ヶ丘ができたのと一緒でここに高校が3つできたからなんだ！」

ラミカ)「いろいろ詳しいのね」

輝)「空ヶ丘が大好きだからね！」

「輝君？」

その時、後ろから声をかけられた。

「あれ？ソラちゃん！？」

輝の顔は一気に真っ赤になる。

（ああ、あの時の。）

ラミカは一度会っている、しかし、その時は時間を止めていたもので……

「そっちの人は？」

ソラの方には面識はなかった。

「ラミカ・リユミネートと言います。」

例のように、礼儀正しくあいさつをする。

「輝君のお友達？」

ソラは輝の方を向きながら聞いた  
しかしその時、目と目があったのがいけなかったのか、輝の頭は真っ白になってしまい、

「うん」

まともに対話ができなくなってしまった。

「良かった…」

ソラは何故か安堵の表情を浮かべた。

「ん？良かったって？」

輝の代わりにラミカがからかうように、問いかける。もちろん意地

悪そうな表情で。

「えっ！？ああイイイイイイヤベベベ別に何もありませんよ？それじゃ。」

そう言つてソラはどこかへ飛んでいった。

（2人共青春してるのね。）

ラミカは未だに顔を真っ赤にしてボーっとしている輝を見て笑った。ちなみにさっきの言葉は輝が行動不能になったため、全く耳に入っていなかった。

「ほらっ、輝！いつまでもボーっとしてないで帰るわよ！」

ラミカが軽く輝の背中を叩く。

「ほえっ？」

不抜けた返事を返し、輝は蘇生した。

そしてまた歩きだす。

「そついえばオチなかったね。」

「作者もテストでヤバい点数とってそんなこと考えている暇なんてないんですよ。」

作者の悪口を言いながらマイペンライへと帰るのであった。



## スピンオフ 1（後書き）

いつか空ヶ丘の説明をしなきゃとか思っていたので、ちょうど良かったです。現実世界の話って言ってますけど、実際架空の街ですからね。

もう、やらかした感と申し訳ない感でいっぱいです。来週はしっかりした話を更新しようと思ってます。

感想ヨロです。（書く人はまずいないだろうけれど。）  
では（^^）／

## 6 話予告（正式）（前書き）

ちよつとした手違いで次回の話の内容が変わりました。これが正式な次回予告です。

## 6話予告（正式）

次回の仮面ライダー空我は！

自動運転みたいです。

ノリで運転したみたいです！

逮捕！

俺は門司仁！よろしく！！

アノヤロウ！あいつソラちゃんに手え出してみろお…ただじゃおかねえ！

死ねえええええ！！クウガあああああ！！！！

ガンバライド！ガン・バ！ガンバ！！！！

ひええええええ！ミオoooooooo。早くoooooooo

この世界のお宝は何か？

次回！ガンバライドな転校生！レッツガンバライド！！

我（僕ら）の空あそらを守れ！空我！！

## 6話予告（正式）（後書き）

今回はログさんの仮面ライダーガンバライド（本当は全部大文字なのですが、スペルに自信がないもんで；）とのコラボです！お楽しみに！

（漆黒の転校生の出番はだいぶ先ですね〜。）

## 6話 ガンバライドな転校生！レッツガンバライド！（前書き）

今回からログさんの仮面ライダーガンバライド（英語のスペル自身ない）とのコラボです！そして高12人がバイクに乗れた秘密も明かされます！お楽しみに！

♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀

前回のあらすじ

「「消えた！？」」

「陸上部入ったからもつ無理」

「あなたたちもバイク乗りたい？」

「完全オリジナルのトライチェイサーならぬスカイチェイサーっす  
！」

「このバイク？拾った！！」

「おりやあああああ！」

ドカーン

## 6話 ガンバライドな転校生！レッツガンバライド！

「あつネジ巻き！」

そして後ろを振り向いた。

さつきモーターを搭載したチーターが爆発したところには、ネジ巻きが粉々になって落ちていた。

「またか！」

宏が輝の頭を叩いた。

「って！だって今回は宏君がキックしろって言ったから！」

頭をさすりながら答える。

「本当は一回現物を飯島さんに見せた方がいいんだろうけどな」

「ハア~~~~~」

2人はため息ひとつ吐き、自分のバイクに近づいて行った。

ウ~~~~ウ~~~~

その時、どこからかサイレン音が聞こえてきた。

ブウウウウン

そして何台かのパトカーが止まった。

「君達。大丈夫だったか？」

そして一台のパトカーから飯島さんが降りてきた。

「はあ、まあなんとか。」

そう宏が答えたとき、あの二台のバイクが飯島の目に止まった。

「このバイクはどうした？」

そう言つて3人をにらみつける。

目を逸らす輝と宏

「これオレが拾つてきました！」

窃盗の罪を自白してしまったミオ

宏は頭を抱えた。

「こっちは？」

そう言つて飯島はスカイチエイサーのシートに触れた。

「えっと…それは事情を知ってる知り合いから緊急用につてもらいました。」

（ウソはついてないもんね……）

「2人はどうして運転できた？」

気になるところをついてきた。

「えっと…自動運転だったので大丈夫でした。」

（そうじゃないと300kmとか出して急ブレーキかけたら死ぬもんね。）

「輝君。まあ君はいいだろう。」

輝はなんとか許された。

「君達は？」

先ほど窃盗の罪を自白したミオと真つ青の宏を向いた。

（ヤバい…どうしよう…）

宏は冷や汗ダラダラだった。

「えっと…」

必死に逮捕されない理由を考えた。そして

「ノリです!!」

やってしまった。

この時点でもう宏の脳ミソは限界だった。

「窃盗および無免許運転の現行犯で逮捕する！」

2人はそのまま警察署に連れていかれ長々と説教されたらしい。

ブウウウウン

ミオと宏が警察署に連れていかれた後は警察がいろいろと調査をした。

「あれわたしといってくれるよね。」

そうつぶやいて今度は安全運転で輝は帰って行った。

黒マントの男はモニターを見て肩を震えさせていた。

「クソおおおおおおお！！！」

ガッシャーーーーーン

実験台のような机の上の物を全て床の上に叩きつけ、怒りを露わにしている。

「もう呪いの力なんてどうでもいい。クウガを徹底的に叩き潰せ！  
アイツらのように二度と戦うことができなくなるまでに！！」

そう言って机の上に残っていたゼンマイを動物の檻の中へ雑に放り込んだ。

「くたばれええええええええええ！クウガああああああ！！！」



「へえ〜そうか……」

けど変わった聞き方をしてきたな？まあ、空ヶ丘なんて珍しい名前だし、高校の名前を間違えたんだろ。

「俺は門司仁！よろしく！」

そう言って手を差し伸べてきたので、握手した。

その後仁君に校長室の場所を教えて教室に帰った。

教室にはちらほらクラスメイトの姿があった。

「見て〜昨日も怪獣騒ぎだつて〜」

女子がケータイを覗き込みながら話している。

「オイ、輝、ちょっと！」

クラスメイトの鈴木くん呼び止められ、そっちの方へ行ってみた。

「このサイトにも書いてんだよ！」

そう言って鈴木くんはスマホをの画面をこっちに向けた。

-----

〽空ヶ丘第二高校裏サイト〽

p n ・ハマ

鈴木ってうざくね？

p n ・ラビタン

まだ鈴木氏ね

p n ・がっぽれ大佐

マジアイツ学校くんな！空気が汚れる。

見なかったことにしよう。

確か鈴木くんが言いたいのってこれかな？

p n ・ハッチャケ

この前オレ怪獣見た！

p n ・音速のスリーパー

どうせコスプレだろ？

p n ・ハツチャケ

そういえば、仮面ライダーもいた！確か……アギト？

p n ・音速のスリーパー

それもコスプレだって！

-----

失礼な！なんでクウガとアギトを間違えるの！？古代の戦士と神の子とは天地の差だよ！

じゃなくて、形はどうであれ、結構広まっているんだな。バレるのも時間の問題かな？

キンコーンカーンコーン

朝のSHRの時間になった。鈴木くんへの誹謗中傷は彼に任せるとして、僕は席についた。一番廊下側の後ろから二番目の席。窓際が良かったな。

とか思っていると先生が入ってきた。

「きりーつ。れい。ちやくせーき。」

日直のいかにもやる気のなさそうな号令の後、先生が口を開いた。

「今日はこの1・Dに新しい仲間が加わることになった!」

別に転校生が来た、でいいのに……………ってまさか!!

「門司君!入って来なさい!」

そうして入ってきたのは、今朝会ったあの少年だった。

「俺は門司仁!得意なことは短距離走です。みんなよろしく!」

「だそうだ。みんな仲良くするようにな。」

そして彼は席へと案内された……………ってオイ!

「門司って変わった苗字ね。」

オノレエ門司あああああ!よりもよってソラちゃんの隣いいいい!

アノヤロオ…もしソラちゃんに何かやったらタダじゃおかねえ!

とか何とかいろいろあつてあつという間に5時限目

眠いとか思っていたけど、一瞬でそんなものは吹っ飛んだ。

例のゼンマイ怪人の姿が教壇にはあつた。

みんなは笑っていた

「オイ先生そりゃあないぜ！」

「理科の時間だからって怪獣のカッコしなくても」

みんなは事の重大さにまだ気づいていない！

「みんな！逃げ……………」

るんだ！と言おうとした時に、もう立ち上がっていたやつがいた。  
宏君ではない。

「あらわれたな！怪物野郎！退治してやる！」

「仁君?!」

そう、あの転校生、門司仁がフォーゼドライバーのようなもの、ガイアメモリをもって立ち上がっていた。

>ガンバライド！<

メモリのボタンを鳴らし、ドライバーのスロットにメモリを差し込んだ。

3・2・1

「変身！」

そう叫び、ドライバーのハンドルを前に押し出した。

>ガンバライド！ガ・ン・バ！ガンバ！<

するとガンバライドのCMソングが流れ出し、見たこともない仮面ライダーへと変わった。

「フォーゼ……じゃない？」

ベルトにスイッチがついてるところを見るとフォーゼのようにも見えるが、彼の外見は放送前、白いとんがりコーンだの米粒だのと叩かれてきたあんな姿ではなかった。

>テープオン<

電子音が流れ、左足の のスイッチを入れるとテープが現れ、ライオンにトゲのついた怪人をテープでぐるぐる巻きにした。

「どおりやあ！」

かけ声一番、テープでぐるぐる巻きのライオンを窓の外へ放り出した！

そしてドライバーのハンドルをまた前に押し出した。

>ガンバライド！ゲキレッツアタック！<

電子音と共に。× □のアストロスイッチのスロットのようなゲートが現れた。

仮面ライダーは窓の外へと飛び出し、ゲートをぐり抜けぐるぐる巻きにキックを決めた！

ドカーン

うおおお~~~~

クラスは拍手喝采だったが、それもつかの間だった。

グルアアアアアア！

今度は犬に鎖鎌を持たせたような怪人が現れた！

キャアアアアアア！

ウワアアアアア！

「宏君！みんなを安全な場所に！」

今の宏君はミオがいないから変身できない。だったら僕がやるしかない！

みんなが行ったことを確認して腹部に手を当てた。

するとアークルが腰に装着される。

左手をアークルに乗せ、左に滑らす。右手は斜め左に伸ばし、ゆっくり右へと動かす。

「変身!!」

そして両手を重ね合わせ、アークルの左側へ押し込む。

そして仮面ライダー空我へと姿を変えた

「オラア！」

まず相手の鎖鎌を避けて右ストレート！そしてさっきライオンを投げ飛ばしたところから鎖鎌犬を放り出す。

「だああああ！」

重力を利用してパンチを打ち込む！

>イリユージョンオン<

どうやら校庭にはまだ別にも怪人がいるらしく、仁君が変身した仮面ライダーが忍者の姿になり戦っていた。忍者らしくしっかり分身を使っている。

くそのころ、宏はく

「んだよこいつら！」

宏はみんなを体育館に押し込んだ後、怪人から逃げていた。

「ひえええええ！ミオおおおお！早くうううう！」

その時、

ブオオオオオン

エンジン音と共に、原チャリに乗ったミオが現れた。

「ホンダズーマ、かつこいい？」

「ミオおおおお！かつこいいから早く変身！」

するとミオの体が光に包まれ、変身ベルト、ジュモクギアへと変わった。

宏はベルトを装着すると、左手を真上に上げて、右手でバックルのレバーを掴んだ。

「変身！！！！」

一声叫びレバーを右から左へ動かす。すると体が木の葉に包まれ、大自然の戦士、仮面ライダー樹木へと姿を変えた。

「今日はこれだ！！」

そう言って一本のネジ巻きをバックルにセットする。

>ガジュマルハンマー！<

そして木製のハンマー、ガジュマルハンマーを召還した。

「キツネにバズーカってシュミ悪すぎだろ！」

そう言うってからジュモクはハンマーでバズーカを叩き割った！

ギヤアアアアアア

バズーカキツネは苦しみ悶えている。

「ラアッ！」

そしてゴルフスイングの容量でバズーカキツネを体育館前から校庭までかつ飛ばした。

「輝！お待たせ！」

校庭では4人（一人＋一人×3）のライダーが戦っていた。

「タアッ！オラア！」

「フン！ダアラ！」

その時！いきなりクウガとジュモクが何者かによって狙撃された。

「「ウフアっ!」」

「この世界のお宝は何かな?」

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e

## 6話 ガンバライドな転校生！レッツガンバライド！（後書き）

クウガとアギトの間違い。知ったかする親戚のおじさんのよくやる凡ミスです。学校にもいます。

こっちはこっちなりで話を進めました。ぜひログさんの仮面ライダーガンバライドも読んでみてください！

では（＾|＾）／

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2914w/>

---

仮面ライダー空我 ～ 青空の勇者(ニューヒーロー)・青空の伝説(ニューレジェン

2011年12月7日00時52分発行